

## 編集後記

ありがたいことに、四国の山の中で『民族植物学ノオト』のレイアウトと編集のお手伝いをさせていただいて、今回で5年目になる。この号の42ページに木俣さんが「農山村に居る人の類型」を掲げておられるが、私の場合は「II 農山村への帰郷民（Uターン、Jターン）：親の高齢化による介護、都市での暮らしが困難、退職などで帰郷した人」に含まれる。ただし、理由はちょっと異なる。「都市での暮らしが困難で帰郷した人」の範疇になるのであろうが、困難というよりは、都市のことよりも生まれ故郷のことに関わりたくなった、というのが理由である。

小金井市で、伝統野菜（江戸東京野菜）で地域活性化をめざすNPOに関わっていたけれど、地域活動に関われば関わるほど、東京でこんなことをしている場合ではない（このNPOの活動は私でなくてもできる）と思うようになり、2010年に生まれ故郷の愛媛県の山奥に戻ってきた。

こちらで何をしているかといえば、5割は編集・デスクワーク（お金をかせぐ仕事）、3割は地域ボランティア（松山にある古民家を地域に開く活動、宇和島で自然保護と地域活性化など）、残り2割が家の手伝い（田畑の仕事、草刈りなど）である。暮らしているところは8軒、15人の小さな集落なので、ここを元気にする活動をとも思っているが、この5年間は居場所づくり、県内各地で活動している人とのネットワークづくり、そして生活空間などを整えることで過ぎてしまった。

そんな私にこの春、うれしい出会いがあった。私と同じような思いをもち、東京からUターンしてきた年代の女性との出会いである。彼女は長年、環境NGOのスタッフとして活動していたが、愛媛の生まれ故郷のことが気になり、35年ぶりに実家暮らしを始めた。伊方原子力発電所の再稼働に反対するのはもちろんのこと、地元町長が推し進めようとしている大規模な風力発電開発にも、仲間たちと異を唱える活動を行っている。彼女はいわばその道のプロであり、「運動の手法」を持っているだけに、地元の人たちは頼もしく思っているに違いない。

その彼女が「地方から出ていった人のうち、100人に一人でもいいから帰ってきてくれると、地方は変わると言う」と言っていたが、同感である。帰ってくるからには、何か思いや志があるとよいが、必ずしもなくてもかまわない。また、生まれ故郷に帰らなくてもよい。都会から人がやって来た（帰ってきた）というだけで、その地の人たちは元気になり、空気の流れも微妙に変化するはずだ。

私がいま暮らしている集落は町の中心部から20キロほどあり、新聞が郵便で昼過ぎに届くほど辺鄙なところだが、インターネットがあるのでなんとかやっつけている。体力と気力の続く限り、とにかく住み続け、機が熟したら次の一步を踏み出したいと思っている。

宮本幹江  
(2015年8月)

